

カトゥッルス「メントゥラ」詩について

Catullus 29, 41, 43, 57, 94, 105, 114, 115

友井太郎

1. はじめに

前1世紀前半の詩人カトゥッルス C. Valerius Catullus は4つのエピグラム(94, 105, 114, 115番)で「メントゥラ」Mentulaに対する誹謗を行っている。mentulaは男性器を意味するもっともふつうの単語であるが*1、これらの詩ではマームツラ Mamurra という人物を指したあだ名として用いられていると一般に理解されてきた。さらに、カトゥッルスはエピグラム以外の詩形でも、マームツラを実名で攻撃対象にしたり(29, 57番)、マームツラの色恋の相手と思われる女を揶揄したり(41, 43番)している。したがって、以上合計8つの作品をカトゥッルスの「メントゥラ」詩と見なすことができる。

本論考では、まずこれら8つの作品の本文*2を日本語訳と簡単な註釈つきで紹介したあと、「メントゥラ」や41, 43番に登場する「フォルミアエの破産者」decoctor Formianusがマームツラを指すと考える根拠を再検証する。そのうえで、詩人が「メントゥラ」と自身との間にどん

*1 J. N. Adams, *The Latin Sexual Vocabulary*, London 1982, pp. 9-12

*2 Mynors校訂のOCT版(R. A. B. Mynors (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958)を底本とする。

な違いがあると主張して、それを誹謗の根拠としているのか明らかにしたい。というのも、カトゥッルスと「メントゥラ」はどちらも不倫者であり、一見よく似たところをもつからである。

2. 本文と日本語訳および註釈

2.1 第 29 番

【本文】

Quis hoc potest uidere, quis potest pati,
 nisi impudicus et uorax et aleo,
 Mamurram habere quod Comata Gallia
 habebat uncti et ultima Britannia?
 cinaede Romule, haec uidebis et feres? 5
 et ille nunc superbus et superfluens
 perambulabit omnium cubilia,
 ut albulus columbus aut Adoneus?
 cinaede Romule, haec uidebis et feres?
 es impudicus et uorax et aleo. 10
 eone nomine, imperator unice,
 fuisti in ultima occidentis insula,
 ut ista uestra diffututa mentula
 ducenties comesset aut trecenties?
 quid est alid sinistra liberalitas? 15
 parum expatrait an parum elluatus est?
 paterna prima lancinata sunt bona,
 secunda praeda Pontica, inde tertia
 Hibera, quam scit amnis aurifer Tagus:
 nunc Galliae timetur et Britanniae. 20
 quid hunc malum fouetis? aut quid hic potest

nisi uncta deuorare patrimonia?
 eone nomine †urbis opulentissime†
 socer generque, perdidistis omnia?

4 uncti *Faernus* : ante *Statius* : cum te *V* 8 adoneus *Statius* : ydoneus *V*
 17 prima *Auantius* : primum *V* 20 nunc γ : hunc *V* timetur *Froehlich* :
 timet *V* 23 urbis opulentissime *V* : urbis o piissime *Lachmann* : orbis, o
 piissimei *Haupt* : alii alia

【日本語訳】

誰がこれを見ることができ、誰が辛抱できるのか、
 もしハレンチで貪欲でバクチ打ちでなかったら、
 マームツラが長髪のガッリアとブリタンニアの
 持っていた豊かなものを持っていることを。
 男色家のロームルスよ、君はこれらを見て我慢するのだろうか。 5
 そして彼はいまや増長し、財産に溢れて
 全ての者たちの寝室を巡り行こうとしているのか、
 白っぽい雄鳩かアドーニスのように。
 男色家のロームルスよ、君はこれらを見て我慢するのだろうか。
 君はハレンチで貪欲でバクチ打ちだ。 10
 その名目によって*³、唯一無二の指揮官よ、
 君は西の果ての島にいたのか、
 君のその出し尽くされたチンコ野郎が
 200回、300回と貪り食うためにと。
 まだ何か忌まわしい気前の良さがあるのか。 15
 彼はやり足らなかったのか、食い尽くし足らなかったのか。
 父祖の豊かな財産が最初に浪費され、

*³ D. F. S. Thomson, *Catullus*, Toronto 1997, p. 280によれば簿記からの暗喩による表現。

第二の生贄としてポントウスの、そして第三として
 黄金を産するタグス川の知る、ヒペーリアの財産が浪費された。
 いま彼はガッリアとブリタンニアに恐れられている。 20
 なぜ君はこの悪漢を大事にするのか。あるいはこの男は何かできるのか
 父祖伝来の豊かな土地を呑み込むこと以外に。
 その名目によって、†都一番の金持ちよ、†
 義理の父と子よ、君たちは全てを滅ぼしたのか。

【註釈】

強欲な浪費家かつ好色漢として描かれるマームツラと、彼に気前よく
 便宜を与える者たちへの攻撃である。マームツラは「唯一無二の指揮
 官」(11行)の「メントウラ(男性器)」(13行)とも呼ばれているが、
 3行目でまず直接に名指されている。一方で、マームツラの後ろ盾につ
 いてはこの詩で実名が出ることはない。このことが様々な解釈の生じる
 原因となっている。

「義理の父と子」*socer generque* (24行)がカエサルとポンペイユスを
 指す(カエサルが娘ユーリアをポンペイユスに嫁がせていたことから)
 とするのは諸註釈者たちの一致した見解であり、特に疑いを差し挟む余
 地はない。また、「唯一無二の指揮官」*imperator unicus* (11行)は「西
 の果ての島」*ultima occidentis insula* (12行)すなわちブリタンニアに
 いたのだから、カエサルで間違いないだろう。しかし、「男色家のロー
 ムルス」*cinaedus Romulus* (5,9行)が誰を指すのかについては、カエ
 サルだとする説*4、ポンペイユスだとする説*5、そしてローマ人一般だ

*4 R. Ellis, *A Commentary on Catullus*, Oxford 1889², p. 98; W. Kroll, *C. Valerius Catullus*, Stuttgart 1959 (reprint of 1929² edition), p. 54; G. Lafaye, *Catulle Poésies*, Paris 1984³, p. 29 n. 2; C. J. Fordyce, *Catullus*, Oxford 1961, p. 161, E. S. deAngeli, 'The Unity of Catullus 29', *CJ* 65 (1969), pp. 81-4

*5 K. Quinn, *Catullus The Poems*, London 1996 (reprint of 1973² edition), pp. 176-7; G. P. Goold, *Catullus*, London 1983, p. 242; A. Cameron, 'Catullus 29', *Hermes* 104

とする説^{*6}に意見が分かれている。

また、底本がダガー記号を付している 23 行目「都一番の金持ちよ」*urbis opulentissime* もマームツラ／「メントウラ」の後ろ盾への呼びかけであるが、韻律からも意味からもテキストの損壊が疑われている箇所であり、今なお様々な修正案が併存している状態と言ってよい。そんな中で Minyard は、これが第一回三頭政治のもうひとりの成員クラススに呼びかけている表現だと考え、写本に伝承された読みを維持しようとしている^{*7}。

3 行目「長髪のガッリア」*Comata Gallia* はガッリア・トランサルピーナのことを指す。大プリーニウス『博物誌』第 36 卷 48 節（本論文第 3 章 2 節を見よ）によれば、マームツラはカエサルのもとでガッリアにおける技術監督者 *praefectus fabrum* をつとめていたという。*deAngeli* も指摘している通り^{*8}、詩の前半部分でのガッリアやブリタンニア（カエサルの遠征先）への言及は、後半（12, 20 行を参照せよ）を含めた 24 行全体の統一性を示唆しているように思われる^{*9}。すなわち、マームツラがカエサルの政治的取り巻きの立場を利用して強欲に財産を集め、それを浪費しているということが、この詩全体を通じてカトウツルスの批判の矛先（のひとつ）である。

8 行目「白っぽい雄鳩かアドーニス」*albulus columbus aut Adoneus* は、どちらもウェヌスのお気に入りである。カトウツルスのもうひとつ

(1976), pp. 155-63

^{*6} P. R. Young, 'Catullus 29', *CJ* 64 (1969), pp. 327-8; W. C. Scott, 'Catullus and Caesar (C. 29)', *CPh* 66 (1971), pp. 17-25

^{*7} J. D. Minyard, 'Critical Notes on Catullus 29', *CPh* 66 (1971), pp. 175-8

^{*8} 'That the poem was intended from the start as a barb in Julius Caesar's side is made clear by the juxtaposition of Mamurra, Gaul, and Britain in lines 3-4.' (*deAngeli*, p. 83)

^{*9} 「男色家のロームルス」をローマ人一般のことだと解釈する Young（脚註 6 を見よ）は、呼びかけの対象がローマ人一般からカエサルらに変わることを根拠のひとつとして詩の分割（1-10 行と 11-24 行）を主張しているが、*deAngeli*（脚註 4 を見よ）はこれに対して詩の統一性を擁護している。私は後者の立場をとる。

の批判対象であるマームツラ／「メントゥラ」の性的放縦がここに表現されている*10。そして、性的放縦は彼の後ろ盾の特徴であるともされている（「男色家のロームルス」）。後に見るように、57 番はマームツラとカエサルの性的放縦を同時に攻撃する詩であり、29 番との主題の共通性を読み取ることが可能である*11。

2.2 第 41 番

【本文】

Ameana puella defututa
 tota milia me decem poposcit,
 ista turpiculo puella naso,
 decoctoris amica Formiani.
 propinqui, quibus est puella curae,
 amicos medicosque conuocate:
 non est sana puella, nec rogare
 qualis sit solet aes imagosum.
 8 aes *Froehlich* : et *V*

5

*10 ただし、「アドーニス」Adoneus は修正読みであるが。

*11 テキスト校訂上の問題としては他にも、4 行目の修正読み uncti（同じく修正読みである ante を採用する校訂者・註釈者も多い。uncti を肯定する意見としては、Minyard, pp. 178-80 を、否定する意見としては、H. A. J. Munro, *Criticisms and Elucidations of Catullus*, Cambridge 1878, p. 96; Thomson, p. 279 を参照せよ。）や、20 行目の修正読み nunc と Galliae timetur et Britanniae（timetur は timet からの修正読み）についての議論（nunc では hunc と同じく長音節となり、行の冒頭 2 音節がイアンボスにならない。ただし、3 行目の冒頭 Mamurram が同様に長音節から始まっていると考えることもできる。また、E. Badian, ‘Mamurra’s Fourth Fortune’ *CPh* 72 (1977), pp. 320-2 は Galliae timetur Britanniae を「ガッリアからとブリタンニアからの生贄に恐れられている」Gallicae timetur et Britannicae に修正することを提案する。A. Allen, ‘Mamurra’s Next Gorge’, *CPh* 78 (1983), pp. 231-2 は「ガッリアとブリタンニアの生贄によって膨れ上がろうとしているのか」Gallica tumebit et Britannica? に修正することを提案する。）がある。もっとも、詩全体の解釈にはあまり影響しないと考えてよい。

【日本語訳】

交わり疲れたア（一）メ（一）アーナ嬢は、
 私にまるまる 1000 の 10 倍を求めたのだ、
 君のその醜い鼻をもつお嬢さん、
 フォルミアエの破産者の情婦は。
 お嬢さんのことを気にかける近親者たちよ、
 友人たちと医者どもを呼び集めたまえ。
 お嬢さんは正気でなく、自分がどんなふうなのか
 姿を映す銅に尋ねることもしないている。

5

【註釈】

「フォルミアエの破産者の情婦」である *Ameana* は詩人とも関係するほど尻軽で、醜いにも関わらず「1000 の 10 倍」*milia decem* (2 行) すなわち 10000 セステルティウスもの大金を求めてくるような女であり、そんな自らを「姿を映す銅」*aes imaginisum* (8 行) すなわち鏡（ただし、*aes* は修正読みであるが）で見つめ直すこともしないほど狂っている。

Ameana は他に見つからない人名であり、テキストの損壊も疑われているが、そうであったとしても修正は困難である。そして「フォルミアエの破産者」はマームツラ／「メントゥラ」のことを指しているとするのが通説である。*Ameana* という人物自身の詳細については、43 番 6 行の「属州」*prouincia* という言葉以外に具体的な手がかりがなく、判然としない。*Skinner* は、嘲笑の対象を醜悪な連れ合いとペアにすることはプラウトゥスやペトロニウスらが用いたのと同じ手法であり、*Ameana* もこの手法のためにでっち上げられた存在だと考えることが可能であるとしている*12。

*12 M. B. Skinner, 'Ameana, Puella Defututa', *CJ* 74 (1979), p. 111

2.3 第 43 番

【本文】

Salue, nec minimo puella naso
 nec bello pede nec nigris ocellis
 nec longis digitis nec ore sicco
 nec sane nimis elegante lingua.
 decoctoris amica Formiani, 5
 ten prouincia narrat esse bellam,
 tecum Lesbia nostra comparatur?
 o saeculum insapiens et infacetum!

【日本語訳】

ごきげんよう、ちっちゃな鼻をもたぬお嬢さんよ
 美しい足をもたず黒い目をもたず
 長い指をもたず乾いた口をもたず
 実に優雅きわまる言葉をもたぬひとよ。
 フォルミアエの破産者の情婦よ、 5
 属州は君が美しいと言っているのか、
 君とわがレスビアが比べられているのか。
 おお馬鹿馬鹿しく愚鈍なる時代であることよ。

【註釈】

41 番と対をなして「フォルミアエの破産者の情婦」を誹謗する詩である。41 番では「醜い鼻をもつ」*turpiculo naso* (3 行) だけであった容姿への攻撃が、この詩では冒頭 3 行ぶんに拡大され、続けて 4 行目では喋り方までもが貶されている。「属州」*prouincia* (6 行) は彼女を美しい

とするが、ローマ的な美をもつレスビア（カトウツルスの恋の相手）には比ぶべくもないと、詩人は最終行での嘆息をもっておおげさに表現してみせる。ここで「属州」とはガッリア・キサルピーナのことだとする解釈が有力である*13。

なお句読点の打ち方については、底本ではなく Murgatroyd の提案*14に従った。また、41 番と 43 番に挟まれた 42 番もまた「フォルミアエの破産者の情婦」についての詩であるという説も行われているが*15、今回は取り扱わない。

2.4 第 57 番

【本文】

Pulcre conuenit improbis cinaedis,
 Mamurrae pathicoque Caesarique.
 nec mirum: maculae pares utrisque,
 urbana altera et illa Formiana,
 impressae resident nec eluentur: 5
 morbosi pariter, gemelli utrique,
 uno in lecticulo erudituli ambo,
 non hic quam ille magis uorax adulter,
 riuales socii puellularum.
 pulcre conuenit improbis cinaedis. 10

9 socii *Auantius* : socii *Scaliger* : socii et *V*

*13 ただし、Ellis, p. 152 はこれに反論している。

*14 P. Murgatroyd, 'A Note on the Structure and Punctuation of Catullus 43', *EMC/CV* 29 (1985), pp. 121-3

*15 P. Young Forsyth, 'The Aemeana Cycle of Catullus', *CW* 70 (1977), pp. 445-50

【日本語訳】

邪悪なる男色家たちはお互いにとって麗しく都合がよいのだ、
 お稚児さんのマームツラにとっても、カエサルにとっても。
 驚くようなことでもない。相等しい汚点が両者に、
 都の別の汚点とフォルミアエのあの汚点が、
 押しつけられて残り、洗い流されはしまい。 5
 彼らは同じように病気であり、双子の両方であり、
 ひとつの小さなソファアーにふたり一緒のちょっとしたディレッタントで、
 あの人よりもこの人のほうがより欲しがりの不倫者ということなく、
 張りあう仲間どうしとして若い女の子たちのものである。
 邪悪なる男色家たちはお互いにとって麗しく都合がよいのだ。 10

【註釈】

マームツラとカエサルに対する名指しでの誹謗である。両者は徹底して二人一組の存在として扱われている。まず、彼らは同性愛カップルである (1-2 行)。ここで、2 行目「お稚児さん」 *pathicoque* の *-que* が *Mamurrae* についていないことから、*pathicus* はカエサルのことをも指しているという説があるが*16、*Mamurraeque* とはできない韻律上の都合によるのであって*17、マームツラだけが「お稚児さん」だと考えた方がよいだろう*18。次に、両者はそれぞれフォルミアエとローマの街で経済的に行き詰っている (3 行目の「汚点」 *maculae* は諸註釈者に経済的なものと解釈されてきた)。さらに、彼らは関心を共有する「ちょっとしたディレッタント」 *erudituli* (7 行) であり*19、どちらも「不倫者」 *adulter* (8 行) として欲望の強さを相競い、若い女の子たちを共に追い

*16 Ellis, p. 201; Quinn, p. 257

*17 Kroll, p. 101

*18 Munro, p. 133; Thomson, p. 341

*19 本論文の脚註 37 を参照せよ。

かける仲の良いライヴァルでもある（9行）。

2.5 第94番

【本文】

Mentula moechatur. Moechatur mentula? Certe.
Hoc est quod dicunt: ipsa olera olla legit.

【日本語訳】

チンコ野郎は不貞をはたらく。チン子が不貞をはたらくって？ さよう。
次のことが言われているのだ。「鉢は自ら植物を集めるものである。」

【註釈】

57番8行で「不倫者」*adulter* とされていたマームツラ／「メントウラ」だが、ここでも「不貞をはたらく」*moechatur* と誹謗されている。「鉢は自ら植物を集めるものである」というのは彼のこの振る舞いを指し示せる一種のことわざなのだろうが、他で見つからない言い回しであるし、具体的にことわざがどのように「メントウラ」の現実にあてはめられて、この2行だけからなるエピグラムを1つの作品として成立させているのかも自明ではない。

Claes は *Mentula* という女性名詞が *moechatur* という動詞の主語となることで、あたかも「メントウラ」が不倫妻になるかのようにも読めること、これも女性名詞の「鉢」*olla* は女性器ならびに（男性どうしの性交における）肛門の暗喩となること（この際、「植物」*olera* は男性器の暗喩）を指摘する^{*20}。すなわち、「チンコ野郎」が女役として男性器を求めるといふ状況のおかしみがこの詩の意図であり、だからこそ1行目には驚きのこもった疑問文 *Moechatur mentula?* が存在するというわけ

^{*20} P. Claes, 'Catullus C. 94: The Penetrated Penis' *Mnemosyne* 49 (1996), p. 66

である*21。上に掲げた私の日本語訳は、この *Claes* の解釈を反映しよう
と試みたものである。

2.6 第 105 番

【本文】

*Mentula conatur Pipleium scandere montem:
Musae furcillis praecipitem eiciunt.*

【日本語訳】

チンコ野郎はピープレイアの山に登ろうと頑張っている。

ムーサたちは小さな熊手鋏でまっさかさまに落とし追ひ払う。

【註釈】

「メントウラ」が詩作を試みているが、それは成功していないという
攻撃。ピープレイア（ピンプレイア）とは、ピエーリア地方の泉ないし
山であって、ムーサと関連付けられる*22。

ここで「メントウラ」の詩への挑戦は、性的な含みのある言い回し
で表現されている。「男性器」*mentula* が「登る」*scandere* のは勃起を、
ムーサの「山」*mons* は女性器を、「熊手鋏」*furcilla* での撃退は去勢を、
それぞれ意味しようと *Boughner* は説明している*23。

*21 ただし、*Ellis, Kroll* および *W. Eisenhut* (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983
はこの部分を疑問文と扱っていない。Thomson, p. 524 を参照せよ。

*22 ただし、この場合に最も適当なヘリコーン山とそこにある泉ではない。*J. K. Deuling*,
‘*Catullus and Mamurra*’, *Mnemosyne* 52 (1999), p. 191 は、「メントウラ」が誤った
山に登り、誤った泉から靈感を得ようとしたと解釈し、その誤りの持つ意味を説明
している。

*23 *R. Boughner*, ‘*Mentula in Catullus, C. 105*’, *CB* 59 (1983), pp. 29-32

2.7 第 114 番

【本文】

Firmano saltu non falso Mentula diues
 fertur, qui tot res in se habet egregias,
 aucupium omne genus, piscis, prata, arua ferasque.
 nequiquam: fructus sumptibus exsuperat.
 quare concedo sit diues, dum omnia desint. 5
 saltum laudemus, dum †modo ipse egeat.

1 Firmano saltu *Aldina* : firmanus saluis *V* 6 dum modo *V* :
 dum tamen β : *alii alia*

【日本語訳】

フィルムムの森によって偽りなくチンコ野郎は豊かだと
 言われている、自らの中にこんなにたくさん素晴らしいものを、
 全ての種類の鳥、魚、牧草地、耕地、そして野生の獣たちを有する森に
 よって。
 無駄だよ。収入に消費でもってまきっているのだ。
 だから私は彼が豊かだと認める、全てが欠けているのであれば。 5
 私は森を称えるだろう、†ただ彼自身が持っていないのでさえあれば。

【註釈】

フィルムムはアドリア海沿岸の街で、現在のフェルモ *Fermo* である。
 そこに所有する土地によって「メントウラ」が豊かであるという世評
 を、カトウツルスは一応肯定しつつ、しかし「メントウラ」の浪費癖に

よりそれも無駄になってしまっていると誹謗する*24。

6行目の *modo* は韻律上問題があり、Goold と Thomson は Richmond による *modio* (穀物等の分量の単位) という修正読みを採用している。また、Munro や Barbara は *modo* を副詞 *modō* ではなく名詞 *modō* とし、(土地の)「大きさ」／(「メントゥラ」の)「節度」などとして読もうとする*25。容易に結論を下せない問題であり、本論考ではこれ以上扱うことをしない。

2.8 第 115 番

【本文】

Mentula habet instar triginta iugera prati,
 quadraginta arui: cetera sunt maria.
 cur non diuitiis Croesum superare potis sit,
 uno qui in saltu tot bona possideat,
 prata arua ingentes siluas saltusque paludesque 5
 usque ad Hyperboreos et mare ad Oceanum?
 omnia magna haec sunt, tamen ipsest maximus ultro,
 non homo, sed uero mentula magna minax.

4 bona *Aldina* : *moda V* 7 ultro *editio Parmensis anno MCDLXXXIII* :
 ultor *V*

【日本語訳】

チンコ野郎は牧草地だいたい 30 ユーゲラ、

*24 ただし、4行目「収入に消費でもってまさっているのだ」*fructus sumptibus exsuperat* は、P. Barbara, ‘Mentula in Catullus 114 and 115’, *CW* 106 (2013), p. 598 にある通り、「メントゥラ」ではなくフィルムムの森が主語であり、「収入よりも維持管理の費用の方が高つく」という意味だと考えることもできる。

*25 Munro, pp. 224-5; Barbara, pp. 601 ff.

耕地 40 ユーゲラを持っている。他は海だ。

どうして彼が富でクロイソスにまされないことがあるう

ひとつの森の中にこんなにたくさん財産を持っているのに、

牧草地、耕地、ばかでかい森と林と沼地を

5

ずっとヒュベルボレイー人の地に至るまで、そして海を大洋に至るまで。

これら全てが大きいものだが、しかし彼自身こそはるかに最も大きいのだ

人間ではなくて、実に大きくて脅威あるチンココそが。

【註釈】

引き続き「メントゥラ」の土地についての詩である。114 番で生産性の高さが言われていたが、ここではその広大さが強調され、富豪の代表ともいうべきリュディア王クロイソスにさえまさる財産だとまで表現されている。「ユーゲラ」 *iugera* は広さの単位であり、「ヒュベルボレイー人の地に至るまで」 *ad Hyperboreos* は「北の果てまで」の意である。

だが、具体的に記された牧草地と耕地の面積、そして「(それらの) 他は海だ」 *cetera sunt maria* という詩句の解釈に関連して、「メントゥラ」の土地の価値は本当に高いものだったのか疑問が提出されている。本論文第 4 章 3 節を参照せよ。

土地の大きさを誇張まじりに強調してきたことを踏まえ、しかしその土地よりも「メントゥラ」自身の方がはるかに大きいと言うのが最後の 2 行である。*mentula* という語が男性器そのものを指す言葉に戻って、一連の「メントゥラ」詩は終わる。なお、「はるかに」 *ultro* は後代の修正読みであって、写本伝承上は「復讐者」 *ultor* である。「メントゥラ」がプリアーポス（果樹園、庭園の守護神で、それらを荒らす者に性的な方法で復讐する男根神）に擬されていると考えれば、こちらの読みを維持することも可能である*26。「メントゥラ」がプリアーポス的なものとして扱われていることについては本論文第 4 章 1 節で再び触れることに

*26 Thomson, pp. 552-3; M. B. Skinner, *Catullus in Verona*, Columbus 2003, p. 140

なる*27。

3. 「メントウラ」、*「フォルミアエの破産者」*、そしてマームツラ

3.1 「メントウラ」とマームツラを同一視する根拠

「メントウラ」がマームツラを指すあだ名であるという解釈は広く受け入れられているが、マームツラという個人名と「メントウラ」という単語を直接に結びつけているのは第 29 番だけである。

Mamurram habere quod Comata Gallia	3
habebat uncti et ultima Britannia?	
.....	
ut ista uestra diffututa mentula	13
ducenties comesset aut trecenties?	

3-4 行目で「マームツラが長髪のガッリアとブリタンニアの持っていた豊かなものを持っている」ことが示され、13-4 行目ではそうした状況が「君（『唯一無二の指揮官』 *imperator unicus*）のその出し尽くされた『メントウラ』が 200 回、300 回と貪り食う」と表現されている。これが、「メントウラ」の正体はマームツラであるとされる最大の、そしてほぼ唯一の直接的な根拠である*28。

*27 テキスト校訂上の問題としては他にも、5 行目 *salтусque paludesque* について、「森の中に」 *in saltu* (4 行)「森」 *saltus* があるという表現になってしまうこと、さらに *paludesque* の最後の *e* は次行先頭の母音 *u* と *elision* しなければならない (5 行目が *hypermetre* である) ことから、損壊を疑う意見がある。Fordyce, p. 402 はこれらを解決する古い修正読みとして「深い沼」 *altasque paludes* を紹介しており、Quinn, Thomson がこれを本文に採用している。また、Goold, p. 233, 264 は Pleitner による修正読み「広漠たる沼」 *uastisque paludes* を採っている。

*28 それゆえ Young (1969) による第 29 番の分割案を受け入れた場合、(Young 自身が p. 328 左コラムで指摘しているように)「メントウラ」がマームツラを指すという解釈の根拠は大きく揺らぐことになる。だが、29 番は 57 番と同様、カエサルと

だが、「メントゥラ」が一貫してマームツラを指しているという解釈を補強する材料は他にもある。まず、通常カトウツルスの個人攻撃は実名を名指してのものである*29 ことから、「メントゥラ」というあだ名も実名と容易に結びつけられておかしくない。上記 29 番を踏まえれば、「メントゥラ」にもっとも結びつきやすい個人名はマームツラであるといえる。

これに加えて、マームツラはカエサルの政治的取り巻きであり、それゆえ「メントゥラ」詩はカエサル一派への攻撃と解釈しうることも、「メントゥラ」がマームツラであることの間接的な根拠となっている。

カトウツルスがマームツラを誹謗する詩によってカエサルの名誉をも傷つけたことは、スエトニウスが証言している。

Valerium Catullum, a quo sibi uersiculis de Mamurra perpetua stigmata imposita non dissimulauerat, satis facientem eadem die adhibuit cenae hospitioque patris eius, sicut consuerat, uti perseuerauit.

(カエサルは) ウアレリウス・カトウツルスによるマームツラについての短詩で自身に消えない烙印が押されたことを隠さなかったのであるが、償いをするカトウツルスをその同じ日に夕食に招き、父の代にあったもてなしを、それがいつものことであったかのように続けたのである。

(スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ユリウス伝」73章)

直接に名指してこそいないものの 29 番がカエサルへの呼びかけを含むものであることは確実であるし、57 番はカエサルとマームツラが同性愛関係にある一組のカップルとして登場させられている。マームツラ

マームツラの強い結びつきを前提に書かれており、Young の考えるような詩の分割は適当でないというのが私の立場である。

*29 T. P. Wiseman, *Catullus and His World*, Cambridge 1985, p. 133

は、直接に名指されたこの2つの詩の中で、カエサルと対をなすものとして扱われているとあってよい。

マームツラがカエサルの庇護のもと莫大な収入を得ていることへの攻撃は29番の中心的なテーマであるが、同様の批判をキケローもやっている。

Quid ergo? exercitum retinentis cum legis dies transierit rationem haberi placet? mihi uero ne absentis quidem; sed cum id datum est, illud una datum est. annorum autem decem imperium et ita latum <placet>? placet igitur etiam me expulsus et agrum Campanum perisse et adoptatum patricium a plebeio, Gaditanum a Mytilenaeo, et Labieni diuitiae et Mamurrae placent et Balbi horti et Tusculanum. sed horum omnium fons unus est. etc.

だからこれはどうだ。法定の日付を過ぎたのに軍を保持している者の立候補がなされることが喜ばしいのか。実に私にとっては、不在にしている者のそれも喜ばしくなかった。だが、それは許された、ということとはつまり同時に前者が許されたということなのである。しかしながら、指揮権が10年間、それもこのように行使されたことが喜ばしいのか。それなら、私が追放され、カンパーニアの土地が失われ、パトリキがブルクスによって、ガーデースの者がミュティレーネーの者によって養子にされたこと、そしてラビエヌスとマームツラの財産もバルブスのヴィツラとトウスクルムの土地も喜ばしい。だが、これら全ての源泉はひとつなのだ。(後略)

(キケロー『アッティクス宛書簡集』第7巻7番6節)

もし「メントウラ」が一貫してマームツラを指しているとすれば、114, 115番で展開される「メントウラ」の広大な所有地についての揶揄も、マームツラの蓄財と浪費への攻撃として読むことができるし、さらにその後ろ盾となっているカエサルを暗に批判しているとまで読むことも可能である。

さらに、「メントゥラ」を攻撃する 2 行のエピグラム 94 番の直前に置かれた 93 番は同じく 2 行のエピグラムであり、呼びかけの対象はカエサルである。

Nil nimium studeo, Caesar, tibi uelle placere,
nec scire utrum sis albus an ater homo.

私は特別熱心に、カエサルよ、君を喜ばせたいとは思わないし、
君が白い人間なのか黒い人間なのか知りたいとも思わない。

(第 93 番)

この詩の配置からも、カエサルと「メントゥラ」を一对のものとして扱おうという意図を読み取ることが可能である。

以上から、「メントゥラ」とマームツラを同一視し、「メントゥラ」詩をカエサル一派への攻撃の一環と位置づけることには十分な根拠があると、私は考える。

3.2 「フォルミアエの破産者」とマームツラを同一視する根拠

続いて、41, 43 番で言及される「フォルミアエの破産者」がマームツラだとされる根拠を見ていきたい。

マームツラがフォルミアエ^{*30}の出身であることは大ブリーニウスによって伝えられている。

Primum Romae parietes crusta marmoris operuisse totos domus
suae in Caelio monte Cornelius Nepos tradit Mamurram, Formiis
natum equitem Romanum, praefectum fabrum C. Caesaris in
Gallia, ne quid indignitati desit, tali auctore inuenta re. Hic namque
est Mamurra Catulli Veroniensis carminibus proscissus, quem, ut
res est, domus ipsius clarius quam Catullus dixit habere quidquid

^{*30} ラティウムにある地中海沿岸の街。ローマからアッピア街道で 88 マイルの地点。

habuisset Comata Gallia. Namque adicit idem Nepos primum totis aedibus nullam nisi <e> marmore columnam habuisse et omnes solidas e Carystio aut Luniensi.

コルネーリウス・ネポスは、マームツラがローマで最初の者としてカエリウスの丘にある自身の家の壁全体を大理石の外装で覆ったと伝えているが、マームツラはフォルミアエウまれのローマの騎士身分で、ガイウス・カエサルのもとのガッリアでの技術監督者であり、ネポスが伝えているのは、このような担い手によってことが創始された以上、何も不名誉の欠けることがないようにするためであった。というのも、このマームツラはウェーローナのカトゥッルス の詩によって痛罵されたが、実際問題として、カトゥッルスよりも自身の家がより明白に、彼が長髪 のガッリアが持っていたすべてを持っていると語ったのだから。また、その同じネポスは、マームツラが最初に屋敷全体において大理石製以外の柱を持たず、そしてすべてをカリュストスないしルーナ産によって中まで詰まった柱として持っていたと付け加えたのだから。

(大プリーニウス『博物誌』第 36 卷 48 節)

ここではマームツラがフォルミアエの出身地ということだけではなく、彼とカエサルとの結びつきや、奢侈への批判、そしてカトゥッルス の詩による攻撃までもが言及されている。

また、フォルミアエにとってマームツラは単なる一出身者にとどまらず、街を代表する人物であったことが、ホラーティウスの以下の詩行から推測できる。

in Mamurrarum lassi deinde urbe manemus,
Murena praebente domum, Capitone culinam.

次に私たちは疲れてマームツラたちの街にとどまるが、
ムーレーナが家を、カピトーが食事を提供してくれる。

(ホラーティウス『風刺詩』第 1 卷 5 番 37-8 行)

カトウツルス自身も、57 番でカエサルとマームツラを名指して誹謗する際に、そのうちの一方をフォルミアエと結びつけている。

nec mirum: maculae pares utrisque, 3
urbana altera et illa Formiana,
impressae resident nec eluentur:

「都（ローマ）の汚点」*macula urbana* が染みつくのはカエサルであるから、「フォルミアエの汚点」が染みつくのは無論マームツラである。

以上から、フォルミアエにとってマームツラは代表的な出身者であり、両者の結びつきはカトウツルスの作品の中でも明示されていることがわかる。「フォルミアエの破産者の情婦」*decoctoris amica Formiani* という詩句にはマームツラおよび「メントウラ」の浪費 (29, 114 番) と性的放縦 (29, 57, 94 番) への揶揄が含まれていると考えるのも自然な解釈であり、「フォルミアエの破産者」をマームツラ、そして「メントウラ」と同一視することには十分な根拠がある。

4. カトウツルスと「メントウラ」

4.1 カトウツルスの二面性

ここまで見てきた通り、カトウツルスは8つの「メントウラ」詩の中でマームツラ／「メントウラ」とその周辺の人々を繰り返し誹謗している。「メントウラ」の罪状は主に強欲と浪費、そして性的な逸脱である。後者に対する批判は、「メントウラ」というあだ名それ自体が含んでいると考えてよい。

perambulabit omnium cubilia

全ての者たちの寝室を巡り行こうとしているのか

(第 29 番 7 行)

non hic quam ille magis uorax adulter

あの人よりもこの人のほうがより欲しがりの不倫者ということなく

(第 57 番 8 行)

Mentula moechatur. Moechatur mentula? Certe.

チンコ野郎は不貞をはたらく。チン子が不貞をはたらくって？ さよう。

(第 94 番 1 行)

だが、性的な逸脱は「恋愛詩人」*31カトゥッルス自身の罪でもなかったか。彼の恋の相手であるレスビアの名が初めて登場する 5 番の歌いだしは、よく知られているように以下の通りである。

Viuamus, mea Lesbia, atque amemus,
rumoresque senum seueriorum
omnes unius aestimemus assis!

生きよう、私のレスビアよ、そして愛し合おう、
頑固な年寄りどものうわさ話を
しめて 1 アスに値踏みしよう。

「頑固な年寄りども」の性的規範から逸脱したカトゥッルスがレスビアに求めるのは、1000 回、次に 100 回、さらにその繰り返しという過剰な数の接吻（7-9 行）である。その過剰性によって逆に「誰か悪意ある者」*quis malus*（12 行）の妨害を防ぐのだという。7 番でも同じテーマが繰り返される。レビューの砂や夜空の星の数ほどの接吻と「詮索好きなたち」*curiosi*（11 行）や「悪意ある舌」*mala lingua*（12 行）からの自衛。ここでカトゥッルスは、「メントウラ」に「悪意ある舌」を

*31 私はカトゥッルスが「恋愛詩人」であるとは思わない。実際、彼が残した詩の多くは自身の恋愛を扱ったものではない。しかし、彼の作品は中核部分を恋愛が占めているとしばしば見なされてきたこと、後続の恋愛エレゲイア詩人たちが彼を自らの系譜に連なる存在とみなしていたこと（プロペルティウス第 2 巻 34 番 87 行、オウィディウス『悲しみの歌』第 2 巻 427 行）も、また事実である。

振るう側ではなく、まさにその「メントウラ」と同様の過剰な欲望を持ち、「詮索好きな者たち」、「悪意ある舌」に狙われる立場にある*32。

カトウツルスはマームツラ／「メントウラ」が「不倫者」*adulter* であり、「不貞をはたらいている」*moechatur* として攻撃しているが、詩人自身もレスビアとの関係が不倫にあたることを公言している。

Lesbia mi praesente uiro mala plurima dicit:

haec illi fatuo maxima laetitia est.

レスビアは夫がいるとき私に対するたくさんの悪口を言っている：

これがあの愚かな男には最大の喜びになっている。

(第 83 番 1-2 行)

nec tamen illa mihi dextra deducta paterna

fragrantem Assyrio uenit odore domum,

sed furtiua dedit mira munuscula nocte,

ipsius ex ipso dempta uiri gremio.

mira V : rara Haupt : muta Heyse : media Landor

だが、彼女は父の右手によって私のために

アッシュリアの香の薫る家へ連れられたのではなく

秘められた小さな贈物を驚くべき夜によって与えたのだ

まさに夫その人の胸から持ち去られたものを。

(第 68 番 143-6 行)

カトウツルスがマームツラを不倫者だとして攻撃するとき、そこで生じているのはまさに「不倫者が不倫を非難する」(*Tatum**33) という事

*32 D. Wray, *Catullus and the Poetics of Roman Manhood*, Cambridge 2001, pp. 143-60 はこの 5, 7 番とそれらに挟まれた 6 番との間に、こうした立場の逆転を見出している。

*33 W. J. Tatum, 'Social Commentary and Political Invective', M. B. Skinner (ed.), *A Companion to Catullus*, Malden 2007, p. 338

態である。Richlin は、カトゥッルスが一方で自らプリアーポス詩の中の男根神のように振る舞いつつ、他方では「メントゥラ」への批判のよ
うに反プリアーポスの態度を示すこともあると指摘している*34。

an, continenter quod sedetis insulsi
centum an ducenti, non putatis ausurum
me una ducentos irrumare sessores?

あるいは君たちは、マヌケな連中として列をなして
100 人や 200 人で座っているものだから、私があえて
一度に 200 人の座った奴にイラマチオするだろうと考えないのか。

(第 37 番 6-8 行)

以上のようにプリアーポスのごとく他者を脅かして悪びれもしないカ
トゥッルスが、「メントゥラ」を以下のように揶揄しているのだ。

omnia magna haec sunt, tamen ipsest maximus ultro,
non homo, sed uero mentula magna minax.

これら全てが大きいものだが、しかし彼自身こそはるかに最も大きいのだ
人間ではなくて、実に大きくて脅威あるチンコこそが。

(第 115 番 7-8 行)

ここで「メントゥラ」は、さながら自身の土地を守る「大きな」*magna*「脅
威ある」*minax* 男根神であるかのように扱われていると解釈できる*35。

このように、「メントゥラ」詩をカトゥッルスの詩集全体の中に置いて
みると、不倫者が不倫を非難し、プリアーポスがプリアーポスを攻撃
するかのごとき詩人の二面性が露わになる。カトゥッルスの「メントゥ

*34 A. Richlin, 'Catullus and the Art of Crudity', J. H. Gaisser (ed.), *Catullus*, Oxford 2007, pp. 283-5

*35 本論文第 2 章 8 節ですでに述べた通り、後代の修正である「はるかに」*ultro* を採
らずに写本伝承の「復讐者」*ultor* を維持し、これをプリアーポス神のことと解釈す
ることも可能である。

ラ」への攻撃は、古今東西を問わず政治的党派間抗争には付き物であるところの、ご都合主義的ダブル・スタンダードに基づくものなのだろうか。

おそらく、ある部分ではそうなのであろう。しかし、カトゥッルスが作品中で示す価値判断を検証することで、「メントゥラ」をより劣ったものとして貶すための基準を発見することができないわけではない。次節からは、カトゥッルスが主張する「メントゥラ」と詩人自身との差異を明らかにしていく。

4.2 ヘボ詩人「メントゥラ」

カトゥッルスは、自身と「メントゥラ」との間の差となっているものが何であると考えていたか。それを探るために、まず手がかりとなるのは 105 番である。わずか 2 行のエピグラムであるから、全体の本文と日本語訳を再掲しよう。

Mentula conatur Pipleium scandere montem:

Musae furcillis praecipitem eiciunt.

チンコ野郎はピープレイアの山に登ろうと頑張っている。

ムーサたちは小さな熊手鋏でまっさかさまに落とし追い払う。

ここではマームツラが詩作を試みていること、そしてそれが（カトゥッルスの判定によれば）無残な失敗に終わっていることが揶揄されている。マームツラが詩人であったという伝承はないけれども、文芸への興味があったらしいことは 57 番 7 行で『ガッリア戦記』、『内乱記』、『類推について』（散逸）の著者カエサルとともに「ちょっとしたディレタント」*erudituli* とされている箇所でも触れられている。*eruditus* に指小辞のついたこの単語は他に現れないものだが^{*36}、彼らを半可通だ

^{*36} Ellis, p202; Quinn, p. 257

とするカトゥッルスの軽侮が表現されているとみてよい^{*37}。

さて、カトゥッルスはしばしば「新詩人」グループの中心人物とされる。これはキケローによって *poetae noui* (『弁論家』第 48 章 161 節)、*οἱ νεώτεροι* (『アッティクス宛書簡集』第 7 卷 2 番 1 節) と呼ばれ、存在が示唆されているものである。グループとしての実在性を疑う意見もあるが^{*38}、その一方で Lyne はこのグループの実在性を認め、伝統的な叙事詩 *epos* ではなくカッリマコス的な小叙事詩 *epyllion* (カトゥッルスの詩集中では 64 番) への関心を共有することを第一の特徴として挙げている^{*39}。いずれにせよ、カトゥッルスが当時のローマにおいてヘレニズム文学の影響を強く受けた新世代の詩人であったというところまででは、特に異論が生じないであろう。こうしたカトゥッルスの文学的立場が、ヘボ詩人「メントゥラ」への軽侮の背景となっているはずだ。

4.3 耕すことのできない広い土地

「メントゥラ」がどのような詩を書いた、もしくは書こうとしたのか、カトゥッルスは残念ながら全く教えてくれない。しかし、本論文第 2 章 6 節で説明した通り、「メントゥラ」の文学上の野心は性的な含意をこめて描写されている。そして、マームツラ／「メントゥラ」の性は、一貫して過剰なものとして詩人の攻撃対象になり続けている。

過剰であるのは 114, 115 番で登場する「メントゥラ」の所有地の広さ

^{*37} もっとも、カエサルと「ひとつの小さなソファアーに」*uno in lecticulo* いるというこの行の性的な含意は明らかであり、C. T. Lewis and C. Short (ed.), *A Latin Dictionary* では、*eruditulus* の訳として *somewhat skilled or experienced (in love)* があてられている。*lecticulus* が寝床とも勉強用の寝椅子とも (Quinn, p. 257)、また前行「病気の」*morbosi* と関連して医療用のものとも (Thomson, p. 342) 解釈できるのと同じように、*eruditulus* も両義性をもった単語として用いられているのかもしれない。だが、いずれにせよカエサルとマームツラの文学趣味への言及で (も) あるということに疑う必要はないように思われる。

^{*38} E. Courtney, *The Fragmentary Latin Poets*, Oxford 1993, pp. 189-91

^{*39} R. O. A. M. Lyne, 'The Neoteric Poets', *CQ* 28 (1978), pp. 167-87

も同じである。その過剰な広さの土地からの収入をもってしても賄いきれないという形で、「メントウラ」の浪費の過剰性も強調される（114 番 4 行）。Deuling は、カトウツルス自身の所有地が保養と慰安の場所とされているのに対し、「メントウラ」の所有地は単に尽きることのない収入源としてのみ使われているという対比を見出している*40。

だが、「メントウラ」の土地はほんとうに莫大な収入をもたらすものだったのだろうか。115 番の 1-2 行目は以下の通りである。

Mentula habet instar triginta iugera prati,
quadraginta arui: cetera sunt maria.

チンコ野郎は牧草地だいたい 30 ユーゲラ、
耕地 40 ユーゲラを持っている。他は海だ。

これについて、最も重要な収入源となるべき部分である「牧草地」*pratium* と「耕地」*aruum* の面積が少ないという指摘がなされている*41。それ以外を占めるとされる「海」が一般に解されている通り「沼地」*paludes*（5 行）のことを指すとすれば、「メントウラ」の土地の生産性はますます疑わしくなってくる。

これに対して Killeen*42 は「海」を広大な土地の暗喩だとし、Thomson*43 はこの「牧草地」と「耕地」を女性器の暗喩、「海」を「男性」*mas, maris* の意味だとすることによって、「メントウラ」の土地が 114, 115 番で一貫して広大かつ莫大な収入をもたらすものとして扱われているという解釈を守ろうとしている。

だが私は、この 2 行がやはり「メントウラ」の土地の有用な面積の少なさを述べていると考える。なぜなら、所有地が広大であり、しかしその大部分が「鳥」「魚」「野獣」*aucupium, piscis, ferae*（114 番 3 行）しか

*40 Deuling, p. 192

*41 Ellis, p. 496; Kroll, p. 287; Skinner (2003), p. 140; Barbara, p. 602

*42 J. F. Killeen, 'Catullus 115. 2', *CPh* 64 (1969), pp. 178-9

*43 Thomson, p. 552

産み出さない「森」「林」「沼地」*siluae, saltus, paludes* (115 番 5 行) であるという指摘こそ、もっとも効果的な誹謗になるだろうからである。

ウェルギリウスは『農耕詩』第 2 卷 412-3 行で「広大な土地を称えよ／狭い土地を耕せ」*laudato ingentia rura, / exiguum colito* と歌い、ホラーティウスは『風刺詩』第 2 卷 6 番 1 行で「これが誓願の中身であった。それほど大きくはない広さの土地 (があらんことを)」*Hoc erat in uotis: modus agri non ita magnus* と語っている。管理を行き届かせることのできる手頃な広さの土地が、このローマ文学の黄金期を代表する両詩人にとって理想であった。そしてそれは、彼らの文学的立場と結びついている。ホラーティウスは上に引いた詩の続きで、このように書いている。

*pingue pecus domino facias et cetera praeter
ingenium utque soles, custos mihi maximus adsis.*

主人のために家畜の群れと他のものを才能を除いて
肥やし、いままでのあなた同様、守り神として私に寄り添いたまえ。

(14-5 行)

ここで「才能」とはホラーティウスの詩才である。家畜は太らせたほうが良いが、詩は痩せていなければならないとする対比は、カッリマコス『アイティア』断片 1 (Pfeiffer による番号) 23-4 行に遡ることができる。

..... αἰοιδέ, τὸ μὲν θύος ὅτι πάχιστον
θρέψαι, τὴν Μοῦσαν δ' ὠγαθὲ λεπταλήν·

……詩人よ、犠牲獣はできるだけ肥えるように

育て上げよ、だがムーサは、おお良き人よ、ほっそりとさせるのだ

「狭い土地を耕せ」という詩句は、単に農耕における教訓としてだけでなく、ヘレニズム的、カッリマコスの文学の標語としても読めるの

である*44。

カトウツルスの「メントウラ」に対する批判も、同様の立場から行われているものと考えられる。「メントウラ」は単に過剰な欲望の発露としての詩しか書くことができず、ほとんど耕すことのできない過剰に広い土地を所有している。114, 115 番に「メントウラ」の文学的才能への揶揄が込められているとまでは言えないだろうが、カトウツルスが「メントウラ」を貶すために用いる価値基準は、おそらく共通している。「メントウラ」の詩も所有地も、ヘレニズム的、都会的洗練を欠くと判断されているのである。

4.4 「フォルミアエの破産者の情婦」とレスビア

カトウツルスは「メントウラ」の所有地が自身のそれと比べて洗練を欠いていると主張する。そして、過剰さと洗練の欠如という土地の瑕疵は、ほとんどそのまま所有者「メントウラ」が持っていると言われる欠点でもある。

これとほとんど同じ構図が、色恋の相手についても行われている。「フォルミアエの破産者の情婦」は「交わり疲れた」*defututa* (41 番 1 行) 状態で「1000 (セステルティウス) の 10 倍」*milia decem* (同 2 行) を求めるほどに性欲および金銭への欲望が過剰であり、その容姿と言葉は洗練を欠いている (同 3 行および 43 番 1-4 行)。そして、「属州」*prouincia* (同 6 行) の賛美するそんな女がカトウツルスの恋の相手レスビアと比べられているのは、全く不当なことであるとカトウツルスは嘆息してみせる。

tecum Lesbia nostra comparatur?
o saeculum insapiens et infacetum!

*44 R. F. Thomas, *Virgil Georgics Volume 1: Books I-II*, Cambridge 1988, p. 233; D. R. Shackleton Bailey, *Profile of Horace*, London 1982, p. 37 n. 9

君とわがレスビアが比べられているのか。

おお馬鹿馬鹿しく愚鈍なる時代であることよ。(第 43 番 7-8 行)

「メントウラ」の色恋の相手であるア (一) メ (一) アーナ (?) は、カトゥッルスのものであるレスビアと比べて劣ったものとされているのである。

それでは、レスビアはいかなる点で「フォルミアエの破産者の情婦」よりも優れているのか。有名な「私は愛し、かつ憎む」*Odi et amo* (85 番 1 行) という詩句からも分かる通り、レスビアは恋愛の対象であると同時に憎悪の対象でもあり、特に (85 番もそれに含まれる) 詩集後半のエピグラム部分ではその色彩が強い。だが、Skinner は、詩集前半の様々な詩形による部分ではレスビアに、新詩人の思想の体现者、理想的な読者の代表という肯定的なキャラクター付けがなされていることを忘れてはならない、と注意を促している^{*45}。

その Skinner も引用しているように^{*46}、Papanghelis はクインティアという女とレスビアとが並置されているエピグラム (86 番) について、レスビアが(大柄だとされるクインティアと対比されて)新詩人的、カッリマコスの美意識に関連付けられていることを指摘している^{*47}。

Quintia formosa est multis. mihi candida, longa,

recta est: haec ego sic singula confiteor.

totum illud formosa nego: nam nulla uenustas,

nulla in tam magno est corpore mica salis.

Lesbia formosa est, quae cum pulcerrima tota est,

tum omnibus una omnis surripuit Veneres.

クインティアは多くの人からみて美しい。私からみても色白、長身、

^{*45} Skinner (2003), p. 63

^{*46} *ibid.* p. 97

^{*47} T. D. Papanghelis, 'Catullus and Callimachus on Large Women (A Reconsideration of c. 86)', *Mnemosyne* 44 (1991), pp. 372-86

背筋が伸びている。これらひとつずつを私はそのようだと認める。
 美しい、というそのこと全ては肯定しないぞ。というのも、優美さが、
 こんな大きな体に塩の粒が存在しないので。
 レスビアは美しい、彼女は全てにおいて最も美しいと同時に、
 ひとりで女たち皆から女の魅力を皆盗んでしまったのだ。

(第 86 番)

大規模で洗練を欠いた詩に対するカッリマコス流の批判と同じように、ここではクインティアがその「大きな体に」 *in magno corpore* 「優美さ」 *uenustas* と「塩の粒」 *mica salis* を有していないことが攻撃されている。これに対してレスビアはそれらを持っているとされるのである。

Papanghelis は、86 番と同じ構図を 43 番にも見出しているし、私も 43 番でレスビアがカッリマコスの美しさを、「フォルミアエの破産者の情婦」がそうでない醜さを代表していると考えるが、さらに付け加えておきたい点もある。

*Salve, nec minimo puella naso
 nec bello pede nec nigris ocellis
 nec longis digitis nec ore sicco
 nec sane nimis elegante lingua.*

ごきげんよう、ちっちゃな鼻をもたぬお嬢さんよ
 美しい足をもたず黒い目をもたず
 長い指をもたず乾いた口をもたず
 実に優雅きわまる言葉をもたぬひとよ。(第 43 番 1-4 行)

86 番の「塩の粒」 *mica salis* について、Kroll は「優美さ」 *Grazie*, *Anmut*, *Fordyce* と Thomson は「刺激的なところ」 *piquancy* とし、「機知」 *Witz/wit* という解釈を斥けている^{*48}。これは、86 番がもっぱら身

^{*48} Kroll, p. 259; Fordyce, p. 380; Thomson, p. 516

体的、外見的特徴について述べられたエピグラムであり、しかも「塩の粒」は「大きな体に」*in magno corpore* 欠けているのだという文脈を考えれば、ひとまず妥当な解釈であると扱ってよいだろう。この場合、「大きな体」に「塩の粒」が欠けているという身体的、外見的な瑕疵は、大きな詩には洗練が欠けているというカッリマコス的な美的判断と、ただ比喩的にのみ対応しているといえる。

中山はカトゥッルスにおける美の概念が内面的なものをその本質とすることを論じ、内面的な美としての「機知」*sal* (13番5行、16番7行、および形容詞 *salsus* として12番4行) の重要性を述べている。それでも、86番の *sal* については、それが「機知」であることを否定する Kroll や Fordyce の解釈に正面から反論することはせず、むしろ『優美』が『機知』を意味する語 *sal* によって表現されることを、カトゥッルスの美が機知と密接に結びついているという主張のひとつの根拠としている^{*49}。

中山はカトゥッルスの詩集中で美と関連しているいくつかの単語について、その多数の用例を比較検討することにより、美の概念の本質が内面的なものであることを示そうとしている。この議論は周到なものであって、ここで異を唱える用意は私にないし、その必要も感じない。しかし、上に述べた通り 86番はあくまで身体的、外見的なものにのみ触れた詩であって、カッリマコス的な美意識は比喩的にほのめかされているに過ぎないと読むことも、相変わらず可能である。中山も、カトゥッルスが 86番で「優美さ」*uenustas* や *sal* という単語を用いて美の内面性を表現しようとしたとしながら、しかし「美しい」*formosus* という語の外面性によって、その試みが十分成功しなかったと見なしている。

その一方で、43番においては「鼻」*nasus* (1行)、「足」*pes* と「目」*ocelli* (2行)、「指」*digiti* と「口」*os* (3行)の順で「フォルミアエの破産者の情婦」の身体的特徴が貶された後、舌鋒の標的が「言葉」*lingua*

^{*49} 中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論』東海大学出版会 1995, pp. 13-40

の「優雅でない」*nec elegans* ことへと至る（4行）。そしてこの（身体ではなく）振る舞いへの言及が彼女の欠点のカタログのクライマックスなのである*50。

43番は86番とは異なり、身体だけでなく振る舞いについても、ヘレニズムの、都会的洗練の欠如を明確に攻撃対象としている。このときレスビアは、ただカッリマコス風の美に喩えられるものを身体に宿している（カッリマコスの美意識は、美的判断を下す詩人の側にのみ存在する）というだけではなく、自らカッリマコス風の洗練された振る舞いを身につけている女として、誹謗の相手である女と対置されている。43番では、カトゥッルスとレスビアが美学上の同志であることがはっきり示されているのである。これは86番と比べ、より踏み込んだ内容だと考えてよいだろう。

5. 結論

ここまで、カトゥッルスの「メントゥラ」詩8篇を概観し、マームツラ、「メントゥラ」、「フォルミアエの破産者」の同一性を再検証した後、カトゥッルスは「メントゥラ」と自身との間にどんな相違点があると主張しているのかという問題について論じてきた。カトゥッルスによれば、「メントゥラ」はヘレニズムの洗練を解さないヘボ詩人であり、そしてその洗練の欠如は「メントゥラ」本人にだけでなく、その所有地や色恋の相手にも宿っている。一方で、「新詩人」のカトゥッルスは、本人のみならずその所有地、恋の相手レスビアもヘレニズムの洗練を体現した存在であることが示唆されている。一見すると同じ不倫者でしかない「メントゥラ」とカトゥッルスとの間にも、このような差異が感じられるようにカトゥッルスは詩を書き、「メントゥラ」を誹謗したのである。

最後に、恋愛詩人としてのカトゥッルスと誹謗中傷詩人としてのカトゥッルスの統一性について触れておこう。カトゥッルスは自らの恋の

*50 Quinn, p. 219

相手レスビアを自らの達成している洗練を共有する者として描き出し、それを敵側の洗練の欠如と対比することによって誹謗の一手段としている。やや誇張して言えば、洗練された恋愛詩を書くということそれ自体が、洗練を欠く敵（恋敵とは限らない）たちへの誹謗なのである。カトゥルスの詩集の統一性はこうした形で把握することができるだろうし、またその把握が彼の後続の詩人たち（e. g. 恋愛詩を引き継いだプロペルティウス、ティブツルス、誹謗中傷詩を引き継いだマルティアーリス）の読解にも資するところ大であろうということを今後の研究のための仮説として提示し、この小論を終わる。

参考文献

- Adams, J. N., *The Latin Sexual Vocabulary*, London 1982
- Allen, A., ‘Mamurra’s Next Gorge’, *CPh* 78 (1983), pp. 231-2
- André, J., Bloch, R., Rouveret, A., *Pline l’Ancien Histoire Naturelle Livre XXXVI*, Paris 1981
- Badian, E., ‘Mamurra’s Fourth Fortune’ *CPh* 72 (1977), pp. 320-2
- Barbara, P., ‘Mentula in Catullus 114 and 115’, *CW* 106 (2013), pp. 595-607
- Bardon, H. (ed.), *Catulli Veronensis Carmina*, Stuttgart 1973
- Boughner, R., ‘Mentula in Catullus, C. 105’, *CB* 59 (1983), pp. 29-32
- Cameron, A., ‘Catullus 29’, *Hermes* 104 (1976), pp. 155-63
- Claes, P., ‘Catullus C. 94: The Penetrated Penis’ *Mnemosyne* 49 (1996), p. 66
- Courtney, E., *The Fragmentary Latin Poets*, Oxford 1993
- deAngeli, E. S., ‘The Unity of Catullus 29’, *CJ* 65 (1969), pp. 81-4
- Deuling, J. K., ‘Catullus and Mamurra’, *Mnemosyne* 52 (1999), pp. 188-94
- Eisenhut, W. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983
- Ellis, R., *A Commentary on Catullus*, Oxford 1889²

- Fordyce, C. J., *Catullus*, Oxford 1961
- Goold, G. P., *Catullus*, London 1983
- Harder, A., *Callimachus Aetia*, Oxford 2012
- Ihm, M. (ed.), *C. Suetoni Tranquilli Opera Vol. I De Vita Caesarum Libri VIII*, Stuttgart 1978 (reprint of 1908 edition)
- Killeen, J. F., 'Catullus 115. 2', *CPh* 64 (1969), pp. 178-9
- Kroll, W., *C. Valerius Catullus*, Stuttgart 1959 (reprint of 1929² edition)
- Lafaye, G., *Catulle Poésies*, Paris 1984³
- Lyne, R. O. A. M., 'The Neoteric Poets', *CQ* 28 (1978), pp. 167-77
- Minyard, J. D., 'Critical Notes on Catullus 29', *CPh* 66 (1971), pp. 174-81
- Munro, H. A. J., *Criticisms and Elucidations of Catullus*, Cambridge 1878
- Murgatroyd, P., 'A Note on the Structure and Punctuation of Catullus 43', *EMC/CV* 29 (1985), pp. 121-3
- Mynors, R. A. B. (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958
- , *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford 1969
- 中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論』東海大学出版会 1995
- Papanghelis, T. D., 'Catullus and Callimachus on Large Women (A Reconsideration of c. 86)', *Mnemosyne* 44 (1991), pp. 372-86
- Quinn, K., *Catullus The Poems*, London 1996 (reprint of 1973² edition)
- Richlin, A., 'Catullus and the Art of Crudity', J. H. Gaisser (ed.), *Catullus*, Oxford 2007, pp. 282-302
- Scott, W. C., 'Catullus and Caesar (C. 29)', *CPh* 66 (1971), pp. 17-25
- Shackleton Bailey, D. R., *Cicero's Letters to Atticus Volume III 51-50 B.C. 94-132 (Books V-VII. 9)*, Cambridge 1968
- , *Profile of Horace*, London 1982
- (ed.), *Q. Horatii Flacci Opera*, Stuttgart 1985
- Skinner, M. B., 'Ameana, Puella Defututa', *CJ* 74 (1979), pp. 110-4
- , *Catullus in Verona*, Columbus 2003
- Tatum, W. J., 'Social Commentary and Political Invective', M. B. Skinner

-
- (ed.), *A Companion to Catullus*, Malden 2007, pp. 331-53
- Thomas, R. F., *Virgil Georgics Volume 1: Books I-II*, Cambridge 1988,
- Thomson, D. F. S., *Catullus*, Toronto 1997
- Wiseman, T. P., *Catullus and His World*, Cambridge 1985
- Wray, D., *Catullus and the Poetics of Roman Manhood*, Cambridge 2001
- Young, P. R., 'Catullus 29', *CJ* 64 (1969), pp. 327-8
- Young Forsyth, P., 'The Aemeana Cycle of Catullus', *CW* 70 (1977), pp. 445-50